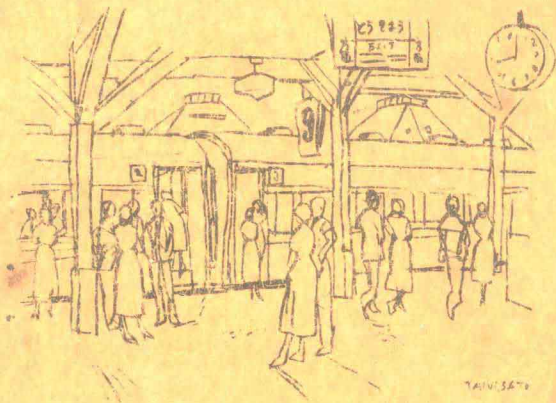


君の名は

夢田一丈著



NHK連続放送劇

NHK ラジオ新聞連載

君の名は 菊田一夫



寶文館版

君の名は

第3部

180 円

地方
費 187 円

昭和二十八年九月廿五日 第一
昭和二十八年十月十日 第十九
刷発行 刷発行

著者 菊田 一夫
きくた かず

発行者 株式会社 宝文館
東京都千代田区神田錦町三ノ二〇

印刷者 早坂善太郎
代表者 高橋長夫
東京都新宿区山吹町三二

発行所

東京都千代田区
神田錦町三ノ二〇 株式会社 宝文館
電話・神田三一四九 振替・東京二八〇番

落丁本・乱丁本は
お取替いたします

三恵社印刷・大光堂製本

君の名は……

第3部 忘却の彼方

目次

佐渡の昼顔（第1部の梗概）

……………一

結婚の幸福（第2部の梗概）

*

波 濤

九

北海道から

一六

*

尖閣湾の思い出

三

六月のある朝

三一

老残の悲しみ

三四

*

女の過古

三八

海女の海辺

四一

人生の日蔭

四五

*

風物詩

四七

幸福の灯

五一

メノコの歌

五五

*

忘却の彼方で……………	七〇
蕾、散りおちて……………	六七
* ……	
湯の町の夜……………	六六
傷痕……………	七七
* ……	
傷痕(続)……………	八一
決闘……………	八六
夜の湖……………	八八
* ……	
夜の湖(続)……………	九三
離婚の決意……………	九七
* ……	
黒百合のごとく……………	一〇一

夜の牧場……………	一〇〇
二人の女……………	一五
* ……	
二人の女(続)……………	一三〇
夫婦と老女……………	一三三
* ……	
星の夜に……………	一三〇
数寄屋橋々畔……………	一三三
平凡な夫婦……………	一三七
* ……	
平凡な夫婦(続)……………	一三九
綾の手紙……………	一四一
アイヌの湖……………	一四四
* ……	
詩人の奉賀帳……………	一五一

燕の便り	一五五
＊	
春樹の上京	一六三
黒い服の男	一六八
＊	
黒い服の男（続）	一七三
新しい客	一七六
＊	
おとなの世界	一八一
善後策について	一八四
＊	
佐渡の昼顔	一九〇
東京―北海道	一九四
＊	
東京―北海道（続）	一九六

父の消息	二〇〇
孤独の女	二〇四
＊	
孤独の女（続）	二〇五
＊	
決裂	二一四
綾は留守	二一九
密輸事件	二二一
＊	
破滅	二三三
希望への脱出	二三八
＊	
波紋（一）	二三三
波紋（二）	二三七
波紋（三）	二四〇

函館にて

二四三

*

高原の馬車

二五三

別れていても

二五八

母の遺品

二五九

美幌の風

二六三

装幀 佐藤泰治

佐渡の晝顔 結婚の幸福

——この篇から読む人のために

第 1 部

昭和二十年十一月二十四日夜八時……それは、氏家^{うじいへ}貞知子^{まこと}が、或る名も知らぬ青年との約束を果たすために、数寄屋橋^{すきやばし}の橋畔へいかなくはならない時刻であつた。

真知子は、そのちようど半年前の五月二十四日、あの東京夜間大空襲のあつた夜……その橋の上で、一人の見知らぬ青年に命を救われたのである。二人は燃え盛る火炎の中で、互に助け合い、そして、やつと命を完うしたのであつた。

二十五日の朝、まだ余煙がいがらつぽく街にただよつている中で見知らぬ同士の二人は別れようとした。その時、青年は真知子にきいた。

「君の名は……」

しかし、真知子は答えなかつた。命を救つてくれた相手に感謝しながらも、若い女の異性に対する警戒心はなぜか解くことができなかったのだ。

青年もまた、ためらっている真知子をみて、強いて名をきこうとはしなかつた。

「互に知らない同士で別れたほうがいいかも知れない……だが、もしも、それまで生命があつたらね、半年後に……そう十一月二十四日の夜だ……この橋の上で、もう一度会おうじやないか……」

約束を胸に、真知子は青年と別れて我が家へ歸つたが、焼けただれた街に我が家は跡形もなく、行きはぐれた両親は、その夜半、生命を失つていた。

佐渡の相川町に住んでいる伯父の勘次が、焼跡の防空壕住いをしている真知子を引きとりにきたのは、約束の夜の二日前、十一月二十二日だつた。

佐渡へ渡つた真知子は、心をひかれながらも、その名も知らぬ相手には、たよりを出す術がなかつた。

そしてめぐり来つた昭和二十年十一月二十四日……この夜、後宮春樹は、約束通りに数寄屋橋々畔に佇ずんだ。しかし、時刻はすぎても、真知子は遂に来なかつた。そして、そこで彼が知り会つたのは、復員して妻子の行方を探し求めているうちに遂に浮浪者となり果ててしまつた、元陸軍少将加瀬田修造という老人だつた。

加瀬田修造は数寄屋橋の上で行き倒れているところをパンパンの棺こがえに一片のパンを与えられ、その恩義を感じて、いまは棺とその友達のおさと三人で、掘立小屋暮らしをしていた。そして、彼を救つてくれた棺はというと、もうアメリカに帰つたきり何の音沙汰もないG Iとの混血児を生んで育てているのだつた。

棺は、修造や彼女等の為にやさしい手をはしてくれる春樹をしたつた。しかし、夜の女であつた棺にとつては、春樹は神のように潔らかで近づき難い……彼女は、生れ出た眼の青い子供に「俊樹」と名をつける

ことによつて、春樹に対する淡い慕情の、せめてもの慰さめとした。

一方、佐渡へ帰つた真知子は、小本港^{おとみなと}の料理屋の娘だという綾と知り会つた。綾は真知子の口から名も知らぬ恋人の話をきいて、

「いい話だねえ」と、いいながらも真知子のあどけなさを笑つて、「何とかしてお探しよ、その人を……恋なんてものは、唯ひとりて悲しがつていたつて、どうにも恰好のつかないものだからね」

真知子に、君の名は……と、たずねた相手を探す方法を教えた。

その頃、相川町に帰省していた浜口勝則^{はまぐちかつのり}という青年は、伯父の勘次の遠縁の者で、東京の某省で官吏をつとめているのだが、彼は勘次のすすめ真知子に会つて以来、結婚の決心をする。だが、そのとき真知子は数寄橋々畔で約束をした青年の名が、後宮春樹であることを知つたばかりだつた。

「じゃあ僕も一緒に、その青年を探しに行こうじゃありませんか……僕は真知子さんの美しい夢を実現させてあげたいのだ」勝則はそんないいかたをした。

真知子と勝則、若い二人は旅に立つた。綾の紹介で会つた本間定彦^{ほんままだひこ}という佐渡の詩人のいうことには、後宮春樹という青年の居処は、定彦と詩人仲間のつきあいをしている和具^{わぐ}の水沢謙吾^{みずさわけんご}が知つてゐる筈……。行く先は、三重県の志摩半島^{しま}にある海女の町和具^{わぐ}。

勝則と真知子は和具で水沢謙吾に会つた。その町は後宮春樹の故郷で、謙吾は春樹の幼友達だつた。

同じ志摩半島の浜島には春樹の姉の悠起枝^{ゆきえ}がいた。

悠起枝と謙吾は初恋の間柄であつたが、悠起枝が西崎という家に嫁いでゆき、良人が戦死して未亡人とな

つたとき、二人はその初恋を実らせて結婚しようとしたが、謙吾の周囲の者は、殊に母のしのは、戦争未亡人である悠起枝の立場を憚つて……かつては謙吾の教え子であつた戸村奈美とむらなみという海女との結婚を強いた。

奈美はどこか精神的に異状があるのではないかと思われるほど、あらゆる衝動に敏感な女だつたが、彼女は幼ない頃からしたつていた謙吾の愛人、悠起枝を敵視した。悠起枝が和具にいられなくなつて浜島へいき「松木」という料亭で働かなくてはならなくなつたのも、奈美のふりまいた噂の爲だつたかも知れない。

真知子は勝則につれられて、「松木」の離れ座敷で悠起枝に会つたとき……

「あなたは私の弟の春樹を、そんなに愛していらつしやるのですか」

悠起枝はいつた。

「ロマンチックな夢……美しいと思いますけどね……だけど果して春樹に会つて、たとえば恋をして結婚したとしても……男つて、それほどまでにつきつめて考えていい相手かしら……春樹は私の弟ですけどね……でも、やつぱり男ですから……結婚は、自分の眼で見た相手とでさえよく失敗するんですものね」

真知子はこうして旅から旅と一緒に廻つてくれる勝則の親切さに……これ以上は、もうどうにも耐え切れない重荷を感じていた。

唯一夜、空襲の中で語り合つた後宮春樹、もういまでは彼女の胸の中で、あまりにも美しく理想的な像として作りあげられてしまつている後宮春樹に、いまさらになつて会うのが恐しかつた。生れてから恋をしたことのない真知子には、恋そのものが恐しかつた。

真知子は遂に、和具の浜辺で勝則に唇を許し、結婚を承諾したのである。

結婚式は、昭和二十一年十一月二十五日……。

半年目毎に数寄屋橋々畔で会おうと約束をした、その一言を後宮春樹がもしも守っているなら……彼はこの式の前夜、十一月二十四日の夜も、橋の上に佇ずんで真知子を待つてゐる筈である。

結婚の前夜、真知子は伯母の信枝の許しを得て、数寄屋橋へいつた。

春樹はいた。真知子は春樹にいつた。

「おなつかしゅうございます」

同じ気持で進みよつて来ようとする春樹に、真知子は悲しい心を押さえていつた。

「でも、あれ以来、これがはじめてで、そして最後の御挨拶になるのが悲しゅうございます……」

「なぜ、そんなことを……」春樹は、おどろいていつた。

「真知子は……結婚するのでございます」

悲しい夜……数寄屋橋に秋の夜霧が白い煙のように流れていた。

第 2 部

三年の月日がすぎ去つた。

梢やあさの保護者であつた加瀬田修造は、ながい間、沖縄へいつていたが、それがかなりの額の金を持つて歸つてきた。

修造は、沖縄密貿易をやつてゐる連中に騙たされて仲間へひきこまれ、彼もその仕事にたずさわつてゐたの

である。元陸軍少将という経歴をもつ修造は若い頃から軍人生活以外の経験を知らない素朴な人間である。彼を悪の仲間ひきこむのは易しく、また終戦以来その混乱の中で幾度となく人に裏切られた彼は、世の中に冷たい眼をむけていた。彼は、はじめはその密貿易から何とかして足を抜こうと焦せたが、終いには積極的にその仕事のために働いた。密輸船を追跡する監視船と仲間が交戦したときに、陣頭に立つたのも彼である。一、二の監視員は死んだ。

いま、その仕事が終わつて、東京に帰つてきてみると、彼は悔恨の情に心を責められている。握つてきた金の素性は誰にも知らせずに、せめて梢や、あさや、梢の子俊樹の、今後の生活を保証する方法を考えてやりたい。彼はその金で、人形町に果物店をひらく。その相談相手は、春樹である。

春樹は、ある厚生保護を担当する役所の宣伝誌の編集長をつとめていたが、つい最近、その編集部を所管する弘報課の課長が變つた。

新しい弘報課長は浜口勝則という男であつた。勝則は真知子の良人である。

その課長室ではじめて挨拶を交わした時、勝則は春樹をわが家へ招待した。勝則は妻の真知子と春樹がつて愛しあつた間柄であることを知っている。彼は春樹をわが家へ呼び、彼自身の眼の前で春樹と真知子に対決させ、その間柄を永遠に断ち切ることを誓わせる……と、いう計画を胸に抱いたのであつた。

春樹は浜口家を訪問した。真知子にとつては意外な客であつた。と同時に真知子は勝則の猜疑心の強さを悲しんだ。

真知子にすれば結婚後三年、結婚前はあれほど親切であつた勝則が、いまではほとんど家庭を省みず……

といつて、彼は他に女をこしらえるというタイプの男でもない。勝則はただひたすらに、妻も家庭も犠牲にしてまでも立身出世のみを追求する、たくましくはあるが、封建的な性格をもつた男なのである。昔風な与えられたものをそのままに受けとる忍従の生活そのものが女の美德であるかのように思いこむ妻ならば、むしろ勝則のような男は頼もしい良人であるかも知れないが、妻も良人もともに幸福な家庭を築きあげようと願う真知子には、勝則のその態度は悲しかった。

しかも、勝則の母の徳枝は、いまは亡い彼女の良人が、勝則と同じタイプの男であつたために、彼女は永い年月、冷たい家庭にただ一人とり残された孤独の生活をつづけ、そのために勝則一人を頼りに偏愛し、その変質的な母親の愛情が、いまでは嫁の手が息子にふれることさえ、いまわしいもののように思いこむ老婆となつてゐる。

しかし一旦嫁いできた浜口家である。真知子はその不幸な条件のなかで、どうかして幸福を築きあげようと決心している。にもかかわらず勝則は、なぜに真知子と春樹の間柄を疑うのだろう。

勝則の強請に応えて……真知子は、春樹にむかい、今後は公私ともに一切の交りを断つことを宣し、春樹もまた真知子の幸福のために、それを誓つたが……しかし、真知子の結婚を機会に消えかかつていた二人の愛情の炎は、そのために逆にはげしく掻き立てられる結果をきたしてしまつた。

勝則は焦らだつた。

その頃にちやうど、浜島から上京してきた春樹の姉悠起枝が、……夜の街で狩り込みの網にかかつた。都会に慣れない彼女は木島という男の手にかかつて、都会の泥沼に落ちこんでいたのである。

勝則はそれを知つて春樹に、己れの所管する弘報課の編集部長を辞するようにと強請した。悲しい感情のもつれである。春樹は職を辞した。

勝則の口からそれをきかされた真知子は、良人の行為を恥じて、春樹の下宿を訪れ……良人に代つて謝罪したが、それを知つた義母の徳枝は、勝則とともに、真知子にむかい、

——春樹との間に不貞の行為がある。

と、真知子を責めたのである。

耐え難い侮辱を悲しんで真知子は佐渡の角倉家へ歸つていつたが、この話をきいた綾は春樹にすすめた。

「真知子さんを救つておやりよ……私だつて、あんたに惚れてるんだけどね……あんたが真知坊と結婚するなら、私はそれでいい……仲の好い同志が結婚して幸福に暮すのをみているのは氣持のいいものだからね」

春樹は佐渡へ行つた。そして吹雪の尖閣湾で、その吊橋から身を投じようとしている真知子を救つた。

「……二人で逃げよう……僕はそのためになら、どんな刑罰をも甘んじて受ける覚悟だ」

……怒濤の音をききながら、春樹は真知子を抱きしめた……だが、真知子はいつた。

「後宮さん……真知子には、やがて……勝則の子が生まれます……真知子は、勝則の子を生まなくてはならぬのです」

尖閣湾の断崖にかけられた吊橋の下に、冬の怒濤は吠え、吹雪は冷たかつた。

波 濤

プラス・バンドと赤色の組合旗を先頭に、菜ツ葉服を着た労働者、官公署の公務員、学生などのスクラムを組んだ一団が街路を行進してくる。ざわめきともつかず、叫び声ともつかない群衆の声が、街を圧倒して近づいてくる。

すれちがいざまにその声をきけば、働く者たちの……鯨波のようなトキの声という、その形容詞が一番ふさわしい……メーデー歌の合唱である。

行列は後部にうつると。プラス・バンドのメロディもききとれないのか、「ワツシヨイ、ワツシヨイ」という、行列の先頭に追いつこうとして走るお祭りのような掛声。声はやがて、街路から街路を洪水のように流れて、そしてまもなく街のどこかへ消えてゆく。

昭和二十五年五月一日……これが皇居前広場の使用を許

された、最後のメーデーであつた。

そして、それから一カ月たつた六月二十五日、韓国と北鮮とをへだてる三十八度線の、思想と思想のたたかいが、銃火のそれにおきかえられて以来、終戦このかた、あんなにも華々しく、叫ばれた民主主義の掛声は、占領軍の行政行きすぎを是正するという、もつともらしい言葉にすりかえられ、世の中の波瀾は誰も知らぬ間に、逆調をしめしはじめていた。

流れを下る波と逆らう波……そこには、いたるところに渦が巻き、波浪が逆まく。

——その波のまにまに流されてゆくより仕方がない。

こんなことを呟やく、誰かの声が、きこえるような気がする。

真知子や春樹や悠起枝や、そして修造や梢、あさ達の住む世の中の、それが、力も金もない者達にとつては、逆らう術もない成りゆきなのであろうか。誰も彼もが、その波濤のなかに、流れの中に押し流されて生きてゆくのかも知

れない。

六月二十五日の午すぎ、街々を喚いて走る号外売りから一枚の号外を買つて、あさが彼女らの店に帰りつくと、

「何の号外だつたんだね」

修造がきいた。

「戦争なんだつて……朝鮮ではじまつたんだつて……」

あさは、恐怖にみちた声で、その号外を、修造にわたした。

号外には、その日の未明午前四時、三十八度線の北側から北鮮軍が崩雪をうつつて韓国側に不法越境してしまつた……

……と、そんな風に記されていた。

「戦争なんて厭だ……戦争があつたから、私達だつて、あんなことを……」

梢は突然そう言つて、口をつぐんだ。夜の数寄屋橋にたずんで、GIを相手に商売をしていたころのことを、思い出したのだろう。あさも、同じ思ひだつたであろう。悠起枝も形こそちがつても、やつていたことは同じだ。

ひとくちに夜の女とよばれる女達のなかにも、いろんな種類の女があり、堕ちる経路もいろいろであろうけれど、梢やあさや悠起枝は、少くとも、喜こんでその経験のなかに身をおいてきたわけではない。だからこそ、彼女らは、彼女らを……はつきりいえば……夜の女に突き落した戦争というものに無限の恨らみを持つているのである。

その戦争を、誰がまたしても物好きに、はじめようというのだろうか。

女たちは怖えたのである。

x

そこに店がある。人形町の電車どおりを一筋か二筋裏通りにひつこんだところ……つい半年ほど前に開店したばかりの果物店である。

沖繩から帰つてきた修造は、浜島の本質宿で持つていた在金を残らず、同宿の若い男に持ち逃げされてしまつたが悠起枝は修造から彼女自身に贈られた金をそっくり水沢謙吾に預けていた。